

退職記念号の発刊に際して

経済学会会長・経済学部長 館野 受男

平成11年3月、原純子教授と石岡雅憲教授が定年を迎えられるにあたり、本学経済学会は両教授の長年にわたる教育および研究上の功績を顕彰するために、「敬愛大学研究論集」(56号)を退職記念号として刊行することにいたしました。

年譜をみますと、原教授におかれましては、中央大学大学院商学研究科修士課程を終了後、日本女子経済短期大学を経て、昭和48年本学に着任され、爾来、日本経済論や金融論などを担当、学生の指導にあたられると共に、教務部長、図書館長を歴任し、さらに昭和63年5月より平成9年8月まで、平成6年5月から同年8月にいたる学長代理の期間を含め、その間連続して学長職の重責を果たされました。

石岡教授におかれましては、戦時中に豊橋陸軍予備士官学校に進まれ、さらに戦後は南カリフォルニア大学商学部経営学科に留学、同大学を卒業され、千葉工商高校を経て、昭和45年本学に着任されました。そして経営分析、商学総論、マーケティング論などを中心に学生の教育にあたられました。先生はまた図書館長や千葉敬愛学園創立70周年記念誌の編集委員の重責も果たされました。

このような業績によって、両先生には名誉教授の称号が贈られました。本学における長年にわたる研究業績および職歴などの詳

細につきましましては、本論集に掲載されております一覧表に譲ることにいたします。

個人的なことになりますが、私は着任する際に原学長・鈴木理事の面接試問を受けた者であります。原先生が学長を勤められた時代は、入学志願者数も年々増大し、国際学部も発足するなど、本学にとって最も良き時代でありました。ヨーロッパの大学生は大学をしばしば比喩的に、また尊称として *Alma mater* と呼ぶそうであります。このシンボライズされた比喩のように、この時期の原先生は大きな包容力をもって、研究・教育の先頭に立ち、大学経営にあたられました。

また石岡先生は歌人としても書家としても夙に高名であります。その豊かな感性をもって、哲学的人間学を基礎とした新しい経営学の構築に尽力なさいました。誰彼と名前を挙げる必要もないほど、古来歌人には人間的力量の奥深い人が多いようです。先生も例外ではありません。先生に歌論をおうかがいした際に、お願いして書いて頂きました色紙が私の貧しい書齋を飾っております。

声立つることなく生を終ふるもの

来たりし蝶はひらひら舞ひて（雅憲）

歴史家ランケは「あらゆる時代は神に直結する」といいます。神があるかあらぬか、それは不明であります。しかし、人生のそれぞれの段階に、またそれぞれの生き方に固有な意味があることだけは確かなようであります。この点では老・壮・青ことごとく等しいと言えるでありましょう。推測するほかないのであります。両先生はともに定年後に大きな期待を抱いているのではないのでしょうか。

ところで2009年には「大学全入時代」が到来するといわれています。その余波が押し寄せて、本学もいよいよ強風豪雨にさらさ

れる状態となりました。すでに97年度の文部省の調査によりましても、「補習授業」を行っている国立大学は67校、私立大学は146校に上るといわれております。いわゆる私大トップ校の経済学部においても算数の四則演算を満足にできない学生がおり、国語力の低下にいたっては修士論文すらまともに書けないといった実態が報告されています。こうしたことについては本学も例外ではありません。大学の生存をかけた課題が突きつけられております。入試改革によって、入学者数を確保することと同時に、教育機能の一層の充実を図ることが当面の課題となります。

幸いなことに引き続き、原先生は学務担当理事として大学経営に、石岡先生は講師として直接学生の指導にあたられます。我々後進として真に心強いものがあります。完全なる定年は暫く「お預け」となるようではありますが、本学の発展のために、厳しいご指導を心から御願ひする次第であります。